日本中國學會報　第73集
2021年10月 9 日　発行
抜刷

学界展望（語学）

秋谷　裕幸
橋本　貴子
野原　将揮
戸内　俊介
石崎　博志
加納　希美
濱田　武志
鈴木　慶夏

ただ小説の翻訳だけは簡単に触れておきたい。SF ファン待望の邦訳であった劉慈欣『三体』全五巻（大森望他訳、早川書房、2019 ～ 2021）は、中国文学の枠を越えて大きな話題となり、中国 SF ブームを巻き起こした。SF 作品としては、郝景芳『郝景芳短篇集』（及川茜訳、白水社、2019）、郝景芳『1984 年に生まれて』（櫻庭ゆみ子訳、中央公論新社、2020）が翻訳されたほか、アンソロジーとしてケン・リュウ編『折りたたみ北京』（中原尚哉他訳、早川書房、2019）、ケン・リュウ編『月の光』（大森望・中原尚哉他訳、早川書房、2020）、『中国・SF・革命』（河出書房新社、2020）、立原透耶編『時のきざはし』（新紀元社、2020）が出版された。

SF 以外でも小説の翻訳は充実していた。王力雄『セレモニー』（金谷譲訳、藤原書店、2019）、閻連科『黒い豚の毛、白い豚の毛』（谷川毅訳、河出書房新社、2019）、阿壠『南京　抵抗と尊厳』（関根謙訳、五月書房新社、2019）、林奕含『房思琪の初恋の楽園』（泉京鹿訳、白水社、2019）、三毛『サハラの歳月』（妹尾加代訳、石風社、2019）、葉石涛『台湾男子簡阿淘』（西田勝訳、法政大学出版局、2020）、徐嘉澤『次の夜明けに』（三須祐介訳、書肆侃侃房、2020）、余華『雨に呼ぶ声』（飯塚容訳、アストラハウス、2020）、李昂『眠れる美男』（藤井省三訳、文藝春秋、2020）、方方『武漢日記』（飯塚容・渡辺新一訳、河出書房新社、2020）など話題作が次々と刊行された。

以上、駆け足の紹介になったがお許しいただきたい。この 2 年間の豊かな成果が土壌となり、次の新しい研究の芽が吹くことを期待したい。（鈴木将久）

◉語　学

はじめに

学界展望（語学）は、日本中国語学会・学界展望編集委員会（委員長・秋谷裕幸）が担当する。

従前どおり、本稿も原則として 2020 年 1 月から 12 月までに日本国内で公刊された著書および学術論文を対象とするとともに、重要な研究成果については海外で公刊された成果にも言及する。

研究分野の分類および執筆者は昨年と同様である。分類は「はじめに」、「音韻」、「文字・訓詁」、「文法・語彙（上中古）」、「文法・語彙（近代）」、「文法・語彙（現代）」、「方言」、「教育」であり、執筆者は、項目順に、秋谷裕幸（愛媛大学）、橋本貴子（神戸市外国語大学）、野原将揮（京都大学）、戸内俊介（二松学舎大学）、石崎博志（関西大学）、加納希美（金沢大学）、濱田武志（神戸市外国語大学）、鈴木慶夏（神奈川大学）である。

文中で用いた学術誌の略号は以下の通り。いずれも 2020 年に出版されたものである。

『東方』　　『東方學報　京都』第 95 冊（京都大学人文科学研究所）
『中国』　　『中国語研究』第 62 号（中国近世語学会）
『言語文化』　『中国言語文化学研究』第 9 号（大東文化大学外国語学部）

『出土』　『中國出土資料研究』第 24 号（中國出土資料學會）
『東京』　『東京大学中国語中国文学研究室紀要』23 号
『中』　『中国語学』267 号（日本中国語学会）
『人文』　『人文研紀要』第 95 号（中央大学）
『語学』　『語学教育研究論叢』第 37 号（大東文化大学語学教育研究所）
『中教』　『中国語教育』第 18 号（中国語教育学会）　（秋谷裕幸）

一、音韻

上中古では Koichi Yoshiike（吉池孝一）“Who is Yan-gao-zhen 閻膏珍 in the Later Han Chronicle?”（『東洋哲学研究所紀要』35）が音韻学的観点から史学的な問題を論じている。『後漢書』に丘就卻（Kujula Kadphises）の息子として記された「閻膏珍」は、1993 年のラバタク碑文発見以降 Vima Taktu と考えられることが多いが、吉池は漢字音写の分析から「閻膏珍」を Vima Kadphises と推定する。船山徹「『出要律儀』佚文に見る梁代佛教の音寫語」（『東方』）は梁初に編纂された、仏典音義書の原型とも言うべき『出要律儀』音義佚文の網羅的収集を行い、この資料の構造について考察を加える。いわゆる漢語音韻学的な研究ではないが、収集された音義佚文およびそこに含まれる漢字音写は南朝梁の梵語学資料、梵漢対音として興味深い。

中古音の音価については、吉池孝一・中村雅之「中古漢語における有声音の帯気性（1）～（3）」（『KOTONOHA』206 ～ 208）がある。

宋～遼代については、反切資料に関する研究が行われている。水谷誠『『類篇』研究』（汲古書院）は『類篇』と『集韻』の関係性に関する十数年来に渉る研究成果を集成したもので、併せて『集韻』や多音字「重」の問題を扱った論考等も収録する。この他にも反切資料に見られる先行典籍との継承関係を論じたものとして、丁鋒「《宮内廳所藏南宋紹興府華嚴會刻八十卷本《華嚴經》及其所附卷末音之研究》（『言語文化』）、大竹昌巳「希麟『續一切經音義』反切小考」（『KOTONOHA』208）がある。後者は希麟『続一切経音義』音注が孫愐『唐韻』系統の韻書と慧琳『一切経音義』の両書を参照して附されたものであることを指摘し、希麟自身が新作したものではないと推定する。

吉池孝一・中村雅之「漢語近世音と契丹文字漢字音（1）～（8）」（『KOTONOHA』209 ～ 216）は中古音から近世音までの間に中国北方で起きた入声韻尾の消失という現象を契丹文字資料に基づいて論じている。契丹文字で表記された漢字音における入声韻尾の有無について先行諸説を詳細に検討した上で、p は保存されていたが k/t は消失していた（但し特定の語においては k/t を保存）ことを確認し、その状況が北宋の『皇極経世声音唱和図』と同様であることに注目している。

『漢字文献情報処理研究』19（好文出版）の「デジタル時代の中国学リファリレンス③」と題した特集の中、野原将揮「4. 音韻をしらべる」は音韻学の重要な概念を極めて平易な言葉で説明するとともに、上古音については研究上の基本的な考え方と近年の研究成果を紹介している。インターネット上での中古音、上古音、方言音の調べ方や利用に際しての注意点についても親切な解説がなされており、音韻学の入門に相応しいだけ

でなく、周辺諸分野の研究者や学生が詩歌や音義書、外国語の漢字音訳、上古出土資料等を扱う際にも参考になるだろう。

近世音では域外資料関係の研究が活発である。満洲文字資料による研究として、鋤田智彦「『清書対音協字』における漢字音（1）」（『アルテスリベラレス（岩手大学人文社会科学部紀要）』107）および鋤田智彦「『満漢西廂記』における漢字音表記」（『水門：言葉と歴史』29、勉誠出版）を挙げる。前者は満洲文字で漢字音を体系的に示した資料として比較的早期の『清書対音協字』（17 世紀後半から末の刊行）における声母表記の特徴を論じている。内田慶市編著『南京官話資料集』（関西大学出版部）は南京官話の資料 3 種を影印し、更に翻字と解題を加えたものである。影印された資料のうち、フランスリヨン市立図書館蔵 *Dictionarium Latino Nankinense Juxta materiarum ordinem dispositum*（1847、一説に 1857）については葛松「耶**稣**会士李秀芳生平及其《按照主**题**排列的拉丁**语**南京**话词**典》初探」（『東アジア文化交渉研究』13）の研究があり、書名に“Nankinense”を含みながらも実際には上海方言を反映することが指摘されている。萩原亮「中露対訳資料『華俄初語』について」（『或問』38）および萩原亮「『中俄話本』の言語について」（『中国』）は 20 世紀初頭のロシア語・中国語の対音対訳資料を研究し、資料に東北官話や膠遼官話の音韻的特徴が反映していることを指摘する。

（橋本貴子）

二、文字・訓詁

まず 2020 年の文字・訓詁に関する単著を瞥見する。藪敏裕『『毛詩』の文獻學的研究―出土文獻との比較を中心に―』（汲古書院）は出土資料を含めた各種テキストを用いて戦国から漢代までの『詩経』の実態を明らかにすることを目的としたものである。劉海宇・玉澤友基編『日本巖手縣立博物館藏太田夢庵舊藏古代璽印』（上海書画出版社）は太田夢庵旧蔵の璽印を収録する。関尾史郎『河西魏晋・＜五胡＞墓出土　鎮墓瓶銘（鎮墓文）集成』（汲古書院）は河西地域（河西以外も一部含む）出土の鎮墓瓶銘文の釈文および解説を付す。訓詁に関わるものとして、何晏『論語集解』に注釈、訓読、日本語訳を付した渡邉義浩主編『全譯論語集解』上下巻（汲古書院）と古典の翻訳に関する問題点を扱った岩本憲司『中國古典飜譯の諸問題』（汲古選書 77、汲古書院）がある。このほか 1984 年に講談社学術文庫として刊行された大庭脩『木簡学入門』が志学社から復刊され、木簡学の手引書として注目される。

定期刊行物は例年と同様に出土資料に見られる文字やそれに関連する問題を扱った研究が多く見られる。『出土』は例年に比べ掲載論文数が多く、内容も豊富である。片倉峻平「清華簡を中心とした楚簡の用字避複についての考察」は古文字資料に見える同一字の重複を避ける「避複」と呼ばれる現象について緻密な検証を加え、「避複」が生じる動機について新たな見解を示した意欲的な論文である。蘇建洲「「趨同」還是「立異」？以安大簡《詩經》「是刈是濩」為討論的對象」は安徽大学蔵戦国竹簡に見える『詩経』の異文を例に、文字の歴史的変化、義通換読（同義換読）という視点から釈読を試みた好論文である。陶安「嶽麓書院秦簡《爲嶽等狀四種》第二類卷冊案例十二和

十三釋文、注釋及編聯商榷」は『嶽麓書院藏秦簡（參）』（2013）刊行以降の議論を踏まえ、編連・釈文に再検討を加える。

大阪大学中国哲学研究室『中国研究集刊』66所載の井上了「『穆天子伝』の後代性について」は西晋の頃、汲郡の戦国時代魏の襄王の墓から出土したとされる竹書『穆天子伝』の成立に関する論考である。『穆天子伝』に見える穆王の臣（畢矩・井利・毛班）が清華簡『祭公之顧命』に見られる反面、秦漢以前には存在しえない語彙が見られる点を指摘し、『穆天子伝』の用語に検討を加えるものである。菊池孝太郎「中国古代の楚地における鬼神観の考察―上博楚簡『鬼神之明』『凡物流形』を手がかりにして―」は楚地における「鬼神観」を描き出すことを目的とし、論文中では上博楚簡『鬼神之明』と『凡物流形』の訳注も付す。鳥羽加寿也「安大簡『詩経』を読むために―『詩経』関連文献提要（一）―」は2019年に公開された『安徽大學藏戰國竹簡（一）』に関連する文献を紹介する。また2019年の展望では取りあげなかったが、『中国研究集刊』65には福田哲之「水泉子漢簡七言本『蒼頡篇』再考―七言本成立の背景」、鳥羽加寿也「上古漢語の声調における地域時代差―特に去声と入声の分類について」のほか、椛島雅弘「銀雀山漢墓竹簡に関する新情報について―山東博物館学術調査報告」のような有益な情報もある。ちなみに『中国研究集刊』は最新の第66号より電子版に完全移行した。同じく2019年の研究として『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要』12に張莉（出野文莉）「白川靜的中國甲骨學研究」がある。

立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所『漢字學研究』8には「金文通解」に加えて、「甲骨文通解」として落合淳思「河南安陽市殷墟大司空村出土刻辭牛骨」がある。「古文字學研究文獻提要」では復旦大学・陳剣の論考をとりあげており、例年のことながら重宝される。

このほか用字の差異や呼称の違いなどの多角的な視点から文献の背景を論じたものに金卓「清華簡『越公其事』の文献形成初探―兼ねて竹簡配列の問題を論ず」（『東京』）がある。

出土資料の訳注として、東京大学東洋文化研究所『東洋文化研究所紀要』176、177に小寺敦「清華簡『晉文公入於晉』譯注」、同「清華簡『子犯子餘』譯注」のほか、『東方』に秦代出土文字史料の研究班「嶽麓書院所藏簡《秦律令（壹）》譯注稿　その（三）」、『出土』に李筱婷「清華簡『赤鳩之集湯之置』譯注」があり、出土資料研究の基礎である訳注作りは活況を呈する。（野原将揮）

三、文法・語彙（上中古）

まず書籍について。佐藤進・小方伴子編『漢学と日本語』（『講座 近代日本と漢学』第7巻、戎光祥出版）は複数の執筆者による、漢語や漢文に関する概論的文章を収める。

次に論文を紹介する。2020年中国語学会奨励賞を受賞した雷瑭洵「古**汉语动词**“假”“借”的音**义**、句法及其演**变**」（『中国語学』266、2019）は、四声別義に与る二重他動詞の論考であったが、雷は引き続きこの方面の研究に精力的に取り組んでいる。「上古**汉语**“告”的音**义**、句法及其演**变**」（『**语**言学**论丛**』61、2020）は、去声の“告”（或いは

“誥”）は「訓告、訓戒」を表すと解釈し、一方、入声の“告”は、“于 / 於”によって対象を間接目的語として導く場合、祭祀や外交上の儀礼的「礼告」を表し、“于 / 於”を用いず対象を導く場合、一般の言論行為である「言告」を表すと理解する。本論文は用例とその注釈に対する検討が綿密であり、説得力に富むうえ、雷の一連の研究はさらに四声別義に反映される派生交替が上古の文法機能を担った接辞に由来するか否か、という問題にも関わるものであり、今後の展開が期待される。なお“告”には言論内容を“于 / 於”でマークする「告＋間接目的語＋于 / 於＋直接目的語」構造もあるが、これは宮島和也「淺談《逸周書・皇門》“開告于予嘉德之説”以及相關問題」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』22、2019）を参照のこと。

邵琛欣「先秦时期汉语“以”字工具短语语序的动词选择倾向」（『東京』）も二重他動詞に関わる論考である。先秦時代の中国語の道具前置詞“以”は、前置型“以＋名詞＋動詞”と後置型“動詞＋以＋名詞”の２種の文型を構成し、動詞は時に“假、授、教、告”等の二重他動詞が用いられる。従来、２つの文型の使い分けは語用論的要因によるものと考えられてきたが、邵は、文型の選択条件が動詞の意味タイプによるものである―前置型は動作動詞を選択する傾向が強く、後置型は動作の過程 / 結果を表す動詞を選択する傾向が強い―ことを、伝世文献を網羅的に調査しつつ論証する。邵は数年来、道具前置詞に関わる研究に意欲的に取り組んでおり、2019 年には「汉语工具介词的语法化路径及其类型学意义」（『语言学论丛』60）も発表している。

三村一貴「上古漢語のモダリティマーカー「蓋」について－その本質的機能」（『中』）は、上古中国語の副詞“蓋”をモダリティマーカーと見なしつつ、発話時に先行する事柄について真偽判断を保留する心的態度を表すことがその本質的機能であると理解し、これが時に語用論的にポライトネス表現に派生することをも論じる。さらに“蓋”は従来、伝聞の証拠性との関わりや、話者の確信度の高さを伝えるものであることが論じられてきたが、三村はいずれも“蓋”の本質的機能ではないとしつつ、前者については文脈依存、すなわち伝聞という事象に備わる過去指向性・非直接経験性が“蓋”の本質的機能に通じているに過ぎず、後者については、確信度に言及しないことが“蓋”の本領と述べる。

髙柳浩平「中古早期の新兼語式について」（『人文』）は上古～中古に見られる「動詞 1 ＋目的語＋動詞 2/ 形容詞」形式を論じたものである。従来これを動詞と補語が目的語によって隔たれた動補構造と見る説と、兼語式（すなわち使役構造）が発展した新兼語式と見る説が示されていたが、髙柳は先行研究を丁寧に踏まえつつ、後者に理があると捉えたうえで、「動詞 2/ 形容詞」の独立性の強さを強調するとともに、さらに新兼語式の成立に２種類の過程を想定する。当該構造に対する検証は、結果補語のみならず、上古の使動用法の衰退と非対格動詞の自動詞化、清濁別義の消長、中国語の総合的言語から分析的言語への類型的変化など多方面の問題に関わり、検討すべき課題は尽きない。

戸内俊介「海昏侯墓出土木牘『論語』初探」（『出土』）は、海昏侯漢墓より出土した木牘『論語』についての初歩的研究であり、文字の書体、文法的特徴を手がかりにテキスト間の異同、継承関係を論じるとともに、上古の語彙・語法に対しても考察を加える。

第５節では、本来否定副詞であった「毋」が木牘『論語』において否定動詞として用いられることを手がかりに、木牘『論語』が前漢中期の用字法を反映したテキストであると位置付ける。第７節では、今本子罕篇“有鄙夫問於我，空空如也”と木牘本“有鄙夫問乎，吾空空如也”の異同と一人称代名詞“吾”と“我”の統語的分布を足掛かりに、“空空如”の主語を“吾”すなわち孔子と見なし、また歴代の注疏で議論のあった“空空”を、「知識がない」との意味に定める。

最後に訳注では、山田大輔「仏教漢文を読む（四）―『百喩経』巻第四校注訓訳稿」（『火輪』41）がある。『百喩経』は５世紀末の口語を反映した資料であり、現代中国語につながる文法現象の萌芽がしばしば見られる。本訳注はそのような文法現象に対し解説を施すほか、議論となる語彙について他の文献における用例や辞書の記述を渉猟し、字句の意味を確定する。（戸内俊介）

四、文法・語彙（近代）

ここでは宋代から民国期を対象とし、以下「白話資料」・「満漢資料」・「域外資料」に分類して概観する。

呉蘭「中国語受動マーカーの文法化」（『中』）は、受動標識“被／**给**／叫／**让**”の使用制限について理想化認知モデル（idealized cognitive model）を用いて歴史的に分析している。“被”は、“被”に直接動詞がつく short passive から、“被”の直後に動作主をとる long passive へと拡張したことで結果に焦点が当てられるようになり、“**给**／叫／**让**”は授与動詞や兼語動詞の使役用法から受動標識へと拡張し、“**给**”はスル的事態に、“叫／**让**”はナル的事態に対応するようになったとする。これを踏まえ受動標識の違いによる構文上の制限は、元の構文の制約を多少なりとも継承したことによると結論づける。千野万里子「叶圣陶の言語について（3）書き換え作業と普通話，禁止・制止を表す語を中心に」（『杏林大学外国語学部紀要』32）は、葉聖陶が下江官話で書かれた自著『稲草人』を普通話の語法にどう書き換えたかという一連の論文の一部をなし、婉曲的禁止・制止を表す“不要”を“不用”へと変更し、また単音節の“**甭**”や“别”を使用していない点は『**骆驼**祥子』とは異なることを指摘する。

満漢資料では竹越孝・スチンバト編『『一百条』系諸本総合対照テキスト（Ⅰ）』（好文出版）が出版された。本書は満洲語教材『Tanggū Meyen（一百条）』の第１話から第25話までを扱い、満洲語・モンゴル語・中国語・英語訳の諸本を一句ごとに対照させた労作である。

次に中国以外で編纂・利用された資料を「域外資料」とし、「唐話・日本資料」・「朝鮮資料」・「泰西資料・訳語」の順に解説する。唐話・日本資料については２篇を挙げる。木津祐子「唐通事の官話教本『三折肱』について」（『言語接触研究の最前線』、ユニウス）は、唐話教本として利用された医学書『三折肱』が文体や構成上『瓊浦佳話』と共通する特徴があり、さらに長崎唐通事による医学教本の利用が語学と医学的知識の同時習得にあったことを指摘する。そして琉球での官話学習が「教訓」との同時習得にあったことと併せ、この結論を唐話と琉球官話の文脈に位置づけている。楊璇「『士

商叢談便覧』における清末北京語文法の研究：《児女英雄伝》との比較」（『語学』）は、北京人・金国璞『士商叢談便覧』（1901-02）の語法を、藤田益子の『児女英雄伝』（1878）の語法研究の成果と対比して論じる。両書はいずれも北京語によるが、『士商叢談便覧』には文言と満洲族に関わる語彙の回避が観られ、受身構文では“被”を使わず“把”を使用する。この“被”を使わない傾向は金国璞『北京官話・今古奇観』にも見られるとする。

朝鮮資料は、竹越孝により『『老乞大』四種版本対照テキスト』（『神戸市外国語大学研究叢書』63）が出版されている。本書は朝鮮半島における官話教材『老乞大』4 種を文単位で対照したもので、旧本系と新本系の改訂過程が一覧できる。そしてこの作業を踏まえ徐小茜「《老乞大》四种版本中的“知道”类**动词**考察」（『中国』）は実詞の動詞「知る」の変遷を考察し、「知る」系の各種語彙が次第に“知道”に一元化するなかで、もとは「知る」義であった“理会”が可能範疇にシフトしたと結論づける。

泰西資料に移ると、千葉謙悟「何盛三の中国語認識―日本より見た 20 世紀前半の「官話」とその変容―」（『近現代中国と世界』、中央大学出版部）は、北京官話や南京官話といった、［地名＋官話］で構成される語が 19 世紀の本土資料や欧文文献に殆ど見られないこと、「北京官話」という呼称が日本で生まれたことに加え、何盛三の各種著作から、官話が地理変種、階級変種、標準変種の諸側面をもつことをつとに論じていることを指摘する。また、本年はトームに関連する業績が数多く発行されており、『正音撮要 Chinese Speaker』（1846）を収める沈国威編『西士與近代中國：羅伯聃研究論集 ロバート・トーム研究（研究と影印）』（関西大学出版部）をはじめ、大島吉郎「《北京官話伊蘇普喩言》における常用動詞認定の試み―動詞重畳型と“把”字句を中心に―」（『言語文化』）が発表されている。後者は当時の口語常用動詞を『児女英雄伝』、『紅楼夢』と比較して考察する。これに加え内田慶市・田野村忠温編著『『華英通語』四種―解題と影印』（関西大学出版部）は新出資料の『華英通語』道光本に加え、トームの『華英通用雑話』（1843）を収める。

域外資料は新資料や稀覯本の影印と研究が陸続と出版されているが、最後にそれらを挙げてまとめとしたい。唐話資料では岩田憲幸『『三字唐話』の研究 基礎資料篇』（白帝社）が九州大学図書館石崎文庫および国文学研究資料館に蔵される二本を校合する。泰西資料の内田慶市『南京官話資料集―《拉丁語南京語詞典》他二種』（関西大学出版部）は、書名に「南京語」と称するも実際は上海方言を反映するリヨン市立図書館蔵 *Dictionarium Latino Nankinense*（1847、一説に 1857）を収める。　（石崎博志）

五、文法・語彙（現代）

文法研究については、まず立命館孔子学院編『「初級中国語文法」とその後の中国語文法』所載の論考を取り上げる。本書は「現代中国語セミナー 2018」の内容に基づき、セミナー講師陣による最新の研究成果を紹介すると共に、中国語教育の従事者に、中国語文法体系の再構築及び教育現場への研究成果還元を提案するものである。杉村博文「可能補語肯定形の用法」は、可能補語の肯定形について論じている。可能補語否定形

による不可能の意味の表出原理については、大河内康憲「中国語の可能表現」(『日本語教育』41、1980)の説がある。杉村はこれを踏まえて肯定形の可能の意味についても見直しを図り、可能補語の形式中の“得・不”は動補構造の状態化のために働き、達成・実現の可否を判断する認識論的機能は持たない、とする独自の見解を示している。丹念な実例分析に立脚した一連の緻密な議論は、特にモーダルな可能表現である“能”が可能補語肯定形と共起する現象に合理的解釈を提示するだけでなく、可能の意味の本質やその表出原理を解明する上でも示唆に富むものである。木村英樹「中国語の疑問詞を考える―その1」は、特に疑問詞の“什么”“谁”“哪个”の対立について論じ、その体系の修正を提案する。意味領域については「範疇/個別・具体の事物/人物」、意味機能については「リスト指示要求/対象指定要求/属性記述要求」というように、各側面に3つのパラメーターを設けることにより、“谁”は個(人)の指定を求めるのに対し、“什么”は範疇の指定を求める疑問詞である、という両者の相違点を明らかにする。更に、個別・具体のモノを問う疑問詞の不在を指摘した上で、その要因について、解を求める際の探索領域において、ヒトに関しては個の単位での知識のストックが有るのに対し、モノにはそれが無いことに因るとし、言語一般に通じる極めて重要な見解を示している。同著者による「中国語の疑問詞を考える―その2」では、“什么样”“怎么样”等のその他の疑問詞についても「その1」と同様のパラダイムの中で捉え得ることが理路整然と示されている。特に中国語教育の現場で表面的に説明されがちな“几”と“多少”の本質的相違について、“几”で問われる数は「指定」であり、“多少”で問われる量は「記述」であるというように、疑問詞の機能の差異が数と量の機能の差異として端的に帰納されている。疑問詞研究だけでなく、数量表現の研究にとっても示唆に富む知見の提供であると言えよう。

次いで定期刊行物における成果を概観する。小野秀樹「現代中国語における形容詞の連用修飾機能」(東京大学大学院総合文化研究科『言語・情報・テクスト』27)は、動詞を修飾する形容詞の意味と機能を多角的に考察し、単音節形容詞が動詞を直接修飾するAV型では、無標の場合に限りこれと形式的に平行する連体修飾構造のAN型同様分類機能を持つとして、先行研究に修正が加えられた。一方、AV型以外の連用修飾において各種の形容詞が持つ機能は(現場的)描写に限られ、例えば二音節形容詞によるA_2地Vでは、これと形式上平行する連体修飾構造のA_2的N型とは異なり、(認識的)描写や限定の機能を持たないことを指摘し、その理由を被修飾語の動詞が表す「行為」に対する認識上の特徴に求めている。潘海华、陆烁、陈信杰、芦大鹏「汉语形容词复杂形式的语义属性和句法表现―结合南方四地方言之讨论」(『中』)は、4地点の中国南方方言の言語データを踏まえながら、複数の形式の状態形容詞(“雪白”“白白的”“很高”“老老实实”等)の意味をタイプ理論から分析し、併せて一連の構造をフレーズとして解釈することにより、当該形容詞の統語的ふるまいや、程度性、主観性等に関わる意味的特徴に対して統一的解釈を試みている。王峰「语气词“呢”的人际互动功能」(『中』)は、命題に対して発話者、もしくは聞き手がもつと仮定される認識や感情の状態に関する前提を「語用論的前提」と規定した上で、語気助詞“呢”は特指疑問文、省

略疑問文、平叙文等による各種の構文において、この種の主観性、間主観性に関する前提を顕在化する機能を持つとして総括する。併せて、当該機能は発話者と聞き手との間での認識共有やコミュニケーション上の協働関係確立に動機付けを持ち、従来“呢”自体の機能とされてきた対比や語気の緩和等の作用は、“呢”による「語用論的前提」の誘発に由来するものであることを指摘する。陈玥「论“V 着”句与“V 起立”句语义功能的差异」(『中』) は“NP$_{受事}$+ V 起来+ AP (“这话听起来有些刺耳”等)”と、“NP$_{受事}$+ V 着+ AP (“这话听着有些刺耳”等)”との比較を通じて、前者は事物の一般属性を表す傾向をもち、未然の事態に対する推測を表す場合にも適用可能であるのに対し、後者は知覚体験により感知された性状を表す傾向をもつことを指摘する。更に動作性の強弱、アスペクト特性等から両構文の相違を多角的に記述し、“V 起来”から“V 着”への置き換え制限は一連の相違に起因するとの解釈を示している。

単行本では、雷桂林『中国語数量表現前置構文の意味機能』(東方書店) が上梓された。本書は“数詞+助数詞+名詞”等の形式から成る数量表現について、その機能と種々の構文中の位置との関連を考察するものであり、博士論文の内容を主軸としつつ、新たな研究成果も取り込まれている。例えば 2009 年に日本中国語学会奨励賞を受賞した雷の議論では“两个留学生来到了我们班”に代表される「不定名詞主語文」の場面描写機能が明らかにされたが、本書では更に描写場面の知覚方法に着眼し、当該構文を存現文より主観性の弱い表現として特徴づけている。

語彙研究については 2 篇を取り上げる。中川正之「日中対照言語学からの視点」(立命館孔子学院編『「初級中国語文法」とその後の中国語文法』) は、語彙や文法に関する複数のトピックについて、対照言語学の観点から多面的に論じたものである。特に目を引くのは、道具を表す名詞の語彙に関する考察である。日本語において道具は「湯呑み」や「黒板消し」のように、動作に直接関与するという見立てが成立する (茶碗は湯を呑んでいると見立てられる) タイプと、「靴べら」のように動作行為の介添え役にすぎないタイプとに分けられる。当該の知見は夙に同氏により中国語、英語との対照を交えて提示されたものであるが (「モノとコトの日中英対照」、神奈川大学中国語学科編『現代中国語学への視座』、東方書店、1998)、これに改めて言及し、従来個別的なものとして扱われてきた語彙について体系化の可能性を示す。彭広陸「“外国语”“外语”と「外国語」「外語」をめぐって」(愛知大学『日中語彙研究』9) は、「外国の言語」を表す中国語の“外国语”“外语”及び日本語の「外国語」「外語」について、語源や使用実態、相互の対応関係等をコーパス調査の導入により実証的に論じたものである。通時的、共時的観点からの複合的考察により、“外语”は出現時期が“外国语”より千数百年遅れるものの、現代においては使用頻度が“外国语”を大きく上回り、日本語の「外国語」に対応する語として定着していることが明らかにされた。更にその要因については、現代中国語の語彙特徴である二音節語化の関与を指摘している。　　(加納希美)

六、方言

先行研究の報告データや文献資料を活用した研究が多く見られた。まず、各変種の個別的研究を紹介する。藤原優美「成都方言における“得”の統語的機能について」(『広島国際研究』26)は成都方言の“得”について、各用法をまとめたうえで標準語との統語上の異同を論ずる。鄭雅云「台湾華語における助動詞「yǒu(有)」をもつ文の時間的解釈」(総合地球環境学研究所『言語記述論集』12)は助動詞“有”のうち動態動詞と共起する例について、有界的(telic)な動詞句が属性解釈を許す事例があること、ならびに、未来の事象を表す場合において台湾華語と客家語・台湾語との間で“有”の使用条件が異なる可能性があることを指摘する。渡邉俊彦「台湾華語の句頭における「啊(ah)」について」(『拓殖大学語学研究』142)は台湾華語の句頭語気助詞(文言文の発語詞に相当)“啊”を閩南語(台湾語)由来の要素と見なしながらも、句頭語気助詞を単なる転移の結果ではなく、すでに固定化された文法現象の一つとして捉えることを提唱する。文法現象に関する論考のほか、**张**盛开「平江各地客**语词汇对**比研究」(静岡大学言語学研究会『静言論叢』3)は湖南省平江県内の3地点と県外の3地点(梅州、桃園、台中)の客家語の語彙を調査し、その結果、平江県内の客家語は語彙の均質性こそ比較的高いものの、同県内の贛語から多くの語彙を借用していることを明らかにする。

文献に基づく方言研究として、遠藤雅裕「論六十年代臺灣客家話課本《新客話課本》的特點」(『中央大学論集』41)は1962年に天主教華語学院(新竹市)が出版した客家語教本『新客話課本』の資料紹介を行うとともに、音韻・語彙・文法の分析結果から、同書が台湾の客家語海陸片に基づいていることを明らかにする。川澄哲也「陝北山歌「信天游」における1人称代名詞“奴”について」(松山大学『言語文化研究』39-2)は陝北地域の山歌(民謡)「信天游」中の、口語では使用されない1人称代詞“奴”が、近代漢語と同様に女性(特に既婚女性)に使われる強い傾向があることを指摘する。任菲「『活用上海語』におけるローマ字表記の音声研究」(『語学』)は大川輿朔『活用上海語』(1924)が採る表記から20世紀初頭の上海語の音韻体系を復元し、その特徴を論ずる。昨年未紹介の張盛開「平江方言韻編『又一経』について」(静岡大学人文社会科学部『アジア研究』14、2019)は湖南省平江県の方言韻書『又一経』の4種の版本を校合しつつ、同書が平江方言の語彙や音韻に基づいた韻書の体裁の諺集であるという見解を示し、併せて、同書の著者を乾隆期の平江県出身の貢生李映奎とする旧説を否定する。

通時的研究では、大西博子「呉語における入声舒声化—進行プロセスを中心に—」(『近畿大学教養・外国語教育センター紀要.外国語編』11-1)が、呉語の入声音節に起きた調値・音長・音価の変化を総合したうえで、舒声化が地域ごとに相異なる順で進行していることを指摘する。遠藤光暁(Endo, Mitsuaki)“Bidirectional change in tone: Evidence from Chinese”(青山学院大学経済学部『経済研究』12)は19世紀から21世紀に著された11変種の報告から導き出される37通りの調値変化のパターンに基づいて、調型間の推移が双方向的に発生し得ることを指摘し、単方向的な変化を想定する声調環流説に対し反証を行う。また、国外での発表ながら秋谷裕幸「**闽语**中早于中古音的音韵

特点及其历时含义」（『辞书研究』2020-5）は、閩語の諸変種が共有する6つの特徴についてまとめたうえで、改新に基づき閩語を定義することが可能であること、改新の共有を根拠として閩語と呉語処衢片の系統的単一性を推定できること、閩語の全ての音韻的対立を古体系の反映と見なすことに対して一定の留保が必要であることなどを論ずる。

方言地理学的研究として岩田礼「漢語方言における語彙変化の特徴：類推の役割」（公立小松大学『国際文化』2）は、時間詞“大后天、大前天”の語頭成分“大”の成因、ならびに、「よる」を指す語“晩上、夜里”の並立する原因に関する最新の仮説を、各時代の文献資料の語例から傍証し、併せて、類推や牽引による有縁性の獲得が高頻度で起きることを中国語の特徴と見なし得る可能性についても展望する。

言語社会学的な研究として小田格「ユネスコ「岳麓宣言」と「方言」に関する一考察」（『人文』）は、ユネスコが使用を避けてきた「方言」（dialect）という文言が岳麓宣言に見られること、ならびに、「方言」の使用が、標準中国語と各地の方言との間に社会的な格差を設ける中国の実情を是認する性質を有していることを指摘する。方言の表記に関する研究には、台北と台南の市街地で観察された台湾語の文字表記の事例について、その分類と分析を行った研究ノートである吉田真悟「台湾語の言語景観における文字使用」（『日本漢字學會報』2）が挙げられる。（濱田武志）

七、教育

2020年は、今後の中国語教育研究の発展可能性を示唆する論文があった。まず、2019年の中国語教育学会全国大会での講演をもとにした報告2篇に言及する。

杉村博文「中国語教員が知っておくべき中国語文法知識とは」（『中教』）は、個別の文法項目に関する教学上の問題点とその解決案の提起という昨今よく見られる論著とは一線を画し、個々の文法現象に通底する中国語の根幹を教授者が知っておくべき文法知識として物語仕立てにしたものである。中国語が単音節語という特徴を有し、文中の語が文法関係や文法範疇を反映する形態変化を有さないことから、中国語の文法構造の基本設計は、（一）語順と機能語が基本的文法手段、（二）主題優位型シンタクスが基本的構文様式、（三）意合法を旨とし、（四）SVO構文では述語前部が開放的・述語動詞と目的語間が半開放的・目的語後部が閉鎖的であるという、中国語の類型論上の諸特徴を適切に位置づけられると論じる。「いま学習中の文法項目が既習の文法項目とどう関係するか、今後学ぶ文法項目に対してどういう伏線となるかを知ることで、文法教育の高効率を望める」という見解は、内発的動機の高い学習者に接する教員にはたいへん示唆に富む。

中国語に対する理解や知識という一面のもう一方で、中国語教育研究は、学習者の中国語習得過程における種々の現象も扱う。後述するように、国内の中国語教育研究では、日本語母語話者が第二言語として中国語を学習する際の考察が圧倒的多数を占めているが、このような流れの中で、高橋朋子「外国人住民が日本社会に求めるもの―中国にルーツを持つ子どもたちへの中国語教育―」（『中教』）は、母語としての中国語教育、より具体的には、継承語（heritage language）としての中国語教育の重要性を論じ

る。中国ルーツの子どもをめぐる言語教育の現状について、親と子の間で意思疎通に使う共通の言語をもたない者が苦悩する事例や、中国語と日本語のどちらも母語話者のように運用できないダブル・リミテッドの事例に触れながら、生育環境・言語環境の多様性（日本生まれか、来日したのが幼少期か学齢期か、日中を頻繁に往来し成長した者か、日本・中国以外の国で成長した者か、両親がそれぞれ何語を母語とし、家庭内で何語を使用しているか等）と言語能力の多様性に関わる課題を述べる。

以下２篇は、従来、教授項目として取りあげられることの少ない、あるいはほとんど取りあげられなかった現象に対する論考である。

単艾婷「結束性の観点から見た中国語中上級学習者の誤用―接続指標に着目して―」（『中教』）は、語彙や文法は単文の中で学習することが多いが、文と文のつながりや談話としてのまとまりに対する学習者の理解は不十分なもので、談話レベルでの結束性に関する指導法が未確立である点に言及し、中上級学習者 61 名による接続指標の使用（非用・多用・誤用）を調査し、日本語表現からの干渉への対策として、（一）テ形や連用形による累加関係は、接続指標を付加したほうがよい点（例：「私は将来沢山の外国人が日本に来て、日本を好きになってほしい。」を“*我希望将来有很多外国人来日本,喜**欢**日本。”としたが、“[……], 并且喜**欢**日本。”としたほうがよい）、（二）日本語では前置きの機能をもつ「が」や、（三）日本語では前件のみ、または、後件のみに使用することの多い接続指標は、中国語では組み合わせて使用することを促したほうがよい点（例「爆買いには良い影響があるが、問題もある。」を“*虽然爆**买**行**为**有好的影响,也有**问题**。”としたが、“[……], 但是也有**问题**。”としたほうがよい）等の提言を示す。

張婧禕、玉岡賀津雄、勝川裕子「日本人中国語学習者によるポーズと重音のプロソディ理解」（『中教』）は、“他拿了封信出来交**给**我”のように、ポーズ（pause）の位置によって「彼は手紙を取って、外に出て私に渡した」（他[拿了封信][出来交**给**我]）と「彼は手紙を取り出して、私に渡した」（他[拿了封信出来][交**给**我]）とで意味解釈が異なり、また、“我想起来了”のように、重音（tone stress）の位置により「私は思い出した」（我想起来了）と「私は起きたくなった」（我想起来了）と異なる意味解釈があり得る現象について、中級学習者 42 名のこれら曖昧文の聴き分けに焦点をあて、語彙得点・知覚得点・ポーズによる判断得点・重音による判断得点・短会話聴解得点・長会話聴解得点という７つの独立変数を用い階層的クラスタ分析をおこなって、（一）ポーズによる理解は向上するが重音による理解の向上は難しい点、（二）ポーズによる理解が高い学習者は単文レベルに関わる理解に優れ、（三）重音による理解の高い学習者は産出能力や長会話聴解など談話レベルの能力が高い傾向にある点を指摘する。

（鈴木慶夏）

【付記】『日本中國學會報』第七十二集に掲載された「学界展望（語学）」37 頁 24 行目に誤記がありましたので訂正いたします。（誤）hergen in（正）hergen i